

刪國起原

伊 5  
2110  
42



開國起原卷四十一

文久年間邦内之形勢一

文久元年辛酉三月廿一日

安後對馬島

常々出精相勤進來外國用多端之要格別  
骨好以之別後之思石を以て萬石村語

正作甘之

九二

同月廿六日園亮演達

近年お續定式臨時に入用莫大に相寄る所歟  
康に有るは故に年々に收納より一倍余に  
由入箇に相成此姿に有るは改革も難し為屈  
次方と有るは黨軍に抱かれ何れも改  
革に及ぶは相成る處右俸に收納より一倍余  
に由方と相成るは不容易歟に片時も  
由捨てずは為重荷に有るは斯るは時勢に由

海舟書屋

況に衆心一致いふに假令預未き事ありは柳  
沈即ち仕筋を無き連中由主法留等此作由  
而已に有るは為る勿論は善方も相立願  
有るは易い方歟其身を忘れ何事とあり厚  
色を盡し支那組束に至るは眞實に相心に向  
後由收納に由は終海相立の法端にあり  
省畧に見込早くと此中同く

同年六月廿二日

百姓所人々大に不持たしん其は是洋相成

与胎子次者製造者一不苦也且又外國高船等  
 買支船者も最若港より中出た右船不  
 持渡以上も 津田内子度々運漕は先づ相  
 成んを航海不事馴る支船者ハ預次者按計没  
 り者毎水支等ハ貸溜り相成ハ尚航海子續等  
 要細く多ハ進るべ及沙汰ハ相又右船製造且  
 買支船者ハ其長船形繪圖面を以當人又ハ此  
 代官領主地取より此軍艦操練所より中出  
 事

右に通水料も此代官領主領主地取より中出

海舟書屋

相觸公事

英佛其外帝王等ハ謁見ハ長

上役口上振る多相觸公書付

竹内下振る

松平石見与

京極能登与

英佛其外帝王等ハ謁見ハ長正役口上振る多  
 今般彼國ハ其由是是主意柄ニ基キ取調  
 下相觸要一解彼方便臣等登 城洋福ハ長由

多分饒長之口上振ニ由右之和親態萬之之意  
 を表し海外一般通規之類ニ由相國先取五國  
 口津使臣差出ル由之振合ニ由之修り簡畧之  
 振正海波方終て 津國之口波神等素より心  
 証不中ニ必能之類ニ由之要重振難易ニ由之  
 振心而遠海島處在難中左之由之萬里之波清  
 態之津使臣差出ル由之詮由之舊く方之由之  
 波方ニ由之派ル由之論由之方之由之故方今  
 英國三ニストル華當西二月中西國三ニスト  
 ル津國之由之口上振也由之是合別冊之通

海舟書屋

取調右由三ニストル口上振書付相派外國在  
 以中該地候事例ル由上

西九月 (文久元年)

佛蘭西帝英吉利女王

正使口上案

殿下使臣等我日本  
 大君殿下之為誼誠意之大命を奉一恭敬して  
 我國書を奉呈し且  
 殿下之安寧祥福を祝一貴國臣民之安全を祈  
 り抑往歲兩國條約取結乙一尔来親睦日不厚

大君特撰る所あるに敢て殿下之信遇せら  
る人を請ふも貴國之軍艦に差越使臣等  
を送迎せらる候其厚意満足之額使臣等謹  
て殿下之大聴小奉聞をへるの命令を奉  
ず

(魯西亞 阿蘭陀 葡萄牙 亨滿生 畧兒)

佛蘭西英吉利其外ハノ地也

清國書局  
以書簡之  
五月廿六日  
書月

松平石見守

京能臺

今收私民莫佛其外以條約漸回之其意以  
 爲之先收無國之幸以條約爲而留之其意使  
 之居在公處之柳奉愛之歐羅巴諸國之形勢改  
 俗小抑宗方其見分爲之其意之顯也其意之

際永世親睦之意是也。表雙方之臣民貿易永  
續之為。此其意也。蓋一身右以顯意之顯何如  
二也。中國書也。以上各作也。方武之亦存也。  
依而有最前亞國之文也。中國書之。和文也。  
本書之。漢文蘭文二振之譯書也。此為編公局右  
以振合之基。別紙。中國書案大意有調。其上  
中左右二。而一。此也。思在公。以漢文之林大學既  
和文之場次郎。若田健助等。以取調。此作。潛心然非  
最前亞國之文也。此也。蓋也。中國書之外。此也。前  
授者。より彼方政事官。以書簡。此也。此也。故凡

各國帝王之清國書案大意

謹言

其國帝王山中其征歲我重臣某之命一貴國  
 公使全權某之親睦貿易之安也定以都府小於  
 乙條約書為面習葡葡西李滿生以來兩國之  
 交際日下厚一故今故好門下此為松平石見為  
 系極能盡為等也貴國之免酒一我誠實懇親之  
 意也表也人之今此三名之者余特小撰任之  
 之而也 殿下切之之信遇也之人奉之信

海舟書屋

不度小友愛之信也厚不一併之貴國之平安  
 也祝也

文久元年辛酉十月朔日

金拾枚  
時順三羽織

竹月卜此為

同

松平石見為

金拾枚  
時順式羽織

系極能盡為

佛蘭西莫吉利其外國之為清使之書也

洋順物也 佈付

同月十一日

金拾枚  
時辰三時

水枕筑後島

金拾枚  
時辰三時

辰部一

伊豆國附島々、兼小笠原島、因拓為市用、  
是、以、月、洋、願、物、也、作、月、

同月布達、云

京都より大教、作、以、方、之、以、月、  
願、分、知、以、而、以、回、事、之、如、昨、余、之、死、を、遂、以、者、  
有、以、其、辰、而、調、以、中、同、以、

海舟書屋

同上、月、願、分、等、以、

皇國、之、為、め、と、海、邊、法、憲、不、能、死、罪、死、流、罪、  
幽、囚、等、相、成、以、者、有、以、其、辰、要、細、而、調、以、中、  
出、以、

此、頃、長、洲、度、より、幕、府、に、建、言、あり、と、云、其、文、に、

近年、外國、より、種、々、難、題、に、中、立、有、以、松、相、親、  
且、内、地、不、意、之、変、も、出、来、仕、内、外、に、以、故、意、之、以、  
時、辰、以、と、奉、召、案、以、勿、論、廟、堂、に、以、善、案、外、向、以、  
一、般、計、概、も、無、以、以、為、以、之、以、詳、議、以、建、策、以、有、

ことと不幸考彼是事々  
 皇國之此榮辱之相拘り  
 考ふるを區々鄙表日夜  
 世論へも心を留め迂僻  
 了月不顧忌諱此門々  
 を取此政体へも拘り  
 懼之此此度此此此此此  
 此此此此此此此此此此  
 年以來度々此此此此此

海舟書屋

公武此一和 敵意此遵奉  
 相合此鄙見 此此此此此  
 公武之此此此此此此此  
 計程之難說此此此此此  
 此此此此此此此此此此  
 不中此愚案此此此此此  
 此此此此此此此此此此  
 合之此此此此此此此此  
 激之人氣一旦在雅仕偷  
 起食之於此一統退縮之

張之胡至之板相成之中即之氣甚也負以慨志  
 在抱之者外走之威力又壓其安也偷之戰  
 色忘心俗焉より固板相成也其之板根に  
 公儀之山而重也何處批判に  
 敵意之旨ハ頑固之山舊規を以確守を托ハ板  
 相唱破約戰卒之況之主張に壯年血氣之者之  
 憤言激然也や釀成に且又彼我之形勢を考へ  
 彼の功利技術を味ハル者ハ固固之況之主張  
 仕根に彼を誇耀に我國有之正氣を挫き商賈  
 貪墨之風に淫浸に議論終る多端に分れ互に

攻

叩撃之形をわし人心洵に土崩瓦解之憾に也  
 叩撃天下之憾合ハハ強に離れハ弱に此支  
 離解散に人心を以一旦有本時點々強虜に成  
 爲り此厥に其何處に其違に其之其何處に  
 其右頑固固固之中者待走之由大靜固係重く  
 其以在其根に其より其以在其是等ハ枝葉に説  
 とも叩撃公武之議端草野に其寂寂事に  
 其之其以在其新に枝葉に其是味を以以遠却に  
 其出其任ハ其方之其其其其其其其其其其  
 能叩撃して攻に能叩撃して守にハ其其其其

常典鎮を奉能ハされハ同くつらハ同く奉能  
 ハされハ鎮を可らハ 沛國作不相立被、凌  
 辱輕侮を交ハるも鎮をハ真の鎮、あハ同  
 くも真の同く、無く然レハ同族の實々  
 沛國郡之上、二つ有る 沛國郡お立ハ此を同  
 族和親、時、の宜く随ハ守株膠柱、多ハ金く  
 有るる為、此ハ又 沛國作不相立ハ基本と  
 中ハ此ハ大義大倫を明ハく天下議論統一人  
 心相悦、此ハ不並、二つ有る、或右相議、終ハ相起  
 りハ本意を熟考仕ハるも 公武ハ此同柄純

海舟書屋

此沛合群ニ由 沛國作相立ハ外有るる為、後  
 くる難説ハ有煩とも是、然ハ其末弊ニ由、  
 有ハ此、其源を塞き其流を治、此成ハ、  
 此流定法、此ハ有、此ハ為、此ハ有、此ハ有、  
 此昔草昧ニ世ニ遠ハ高 沛國世ニ来、厚キ此  
 世話ハハ文教大ニ同、ハ倫理世ニ明ハ、一、君  
 親を、宗奉ハ三尺ノ童子も口ニ藉ハ、此ハ相  
 成ハ、此ハ是、此ハ是、此ハ是、此ハ是、  
 天下ハ大徳を、此ハ是、此ハ是、此ハ是、  
 此ハ是、此ハ是、此ハ是、此ハ是、此ハ是、



敵感も下は物左元より因預る倅へ由泥に

敵慮より汝為起右 沛回建之旨

物誕色以正  
作右色沛道奉  
抱

古今以列藩以內沙特相成以乃一條理判治人

心 平 感 服 仕 退 編 々 氣 一 旦 進 張 二 相 改 り 倫 安

之陋習也奮發仕神別億兆之人心一和一團

之正氣已相成若後種之爲議見永解任亮也

內顧之患去之  
沛國戚凜然大淵一相振

公以文章成就  
下位以迂僻之  
初見三石齋

以右を始より清廟議之上に於て大海を涓滴

2 力 相 成 心 無 公 二 力 至 之 公 以 在 教 代 正 限

九二七

松平大膳大主

今朝疊城掛坂下馬石翁云狼藉之

海舟書屋

安後對馬島

同廿一日  
大和与相渡

外國より

九三

此處より一條何より三ニストルに對話を以  
ニ而て聊相達し康も相見ゆる別紙に語を以  
尚相記し要し概にニ身心にニ中並にニ中  
概何より書簡を以し中並に概書簡並に調  
事

但彼方ニ而も而より及兼て中あより而  
概中而を達し康も相見ゆる別紙に語を以  
成文し事実を中並に方ニ概に對馬島概  
而もあより小概に概ニ而肺に而も不都合ニ

海舟書屋

二方より事

此頃京師より作下されし 初漢ニ云

夷狄月ニ猖獗 中國威日ニ途巡ニ及深ニ為  
惴 宸襟後ニ國東に波後中ニ終ニ七八ヶ年  
乃至十ヶ年ニ月ニ是是非非接征討何れニも  
必ニ及拒絶旨言上依り暫し猶豫有る武備元  
實海軍訓練を勿論第一

皇國一心一同ニ不相成ゆるを蠻夷壓倒し難  
き候ニ而も先國國中一和を基派とす

九三  
敵慮ニ付預テ通

皇妹 大樹ニ配偶公武は合伴字門ニ在表ハ  
而深重

聖慮遐邇ニ布告シ海内服和 冲國威更張ス  
機會不失振屹度ニ廻遠累ハ蒙  
恩召ム幸

同年正月廿一日

第七号

千八百六十二年二月十八日江戸合衆國

海舟書屋

使臣館ニテ外國事務宰相 久世大和守 安房對馬守 台下  
小呈ス

余謹テ台下小告知スルメ此書ニ共ニ併新  
巴尼亞ハール、マーエイス、テイト女王の外國  
事務宰相より余ニ名當セリ書翰の譯書を封  
入ス恐惶敬白

日本立留ミニステル、レシテント、

トウセンセントハルリス 手記

千八百六十一年正月十二日フトリツ止ム

余謹て去ル 五月二日附の足下の書翰之日  
本政府の輪報書を落す一より但し 昨書ハ日  
本政府ハ於て 五月一日より足下の好意ある  
間今を以て 未々條約を有依とさる 而の諸政  
府より送り 外國人より對し 其國門より於て人心穩  
ありされハ 残念あると 今當今此の法必と條  
約を有依とさる 能はざるやを知らざるかと  
必要ありと思ひて 之と一 而の者あり  
余上より記さる 輪報書を落す一 未とを足下

よ告げ且つ 我り 質明ある 君主ハ一レ、マリー  
エステイト 是 班牙女王政府の名を以て 下  
舉ぐる 而の回答を帝國政府より告げらる 未  
とを乞ふ

日本政府ハ 其國中の群民若民ハ 皆兄弟ある  
未とを依とる 外國人を恨み且つ 外國人と交  
はるを欲とさる 遂説あるとを悲めり 國民の  
智巧を盡して 産物ある 而の品物を以て 外國  
の産物と貿易するハ 其産物を増息し 且つ 貴  
人ハ之レ 亦中て 利益を得 賤民ハ之レ 亦中て

工役多く安んずる生活をもつる若民を富有  
 ありしむる確信の法策あり今日日本人の考慮  
 する物價の騰貴ハ只表面の之に懸徴たり而  
 して此レ却て輪出高法ふやう何物に限り  
 諸物品の價ひ多くあり一證たり日本人ハ此  
 如き事を廢棄し其利益を消えしむる世界の  
 法大國の人民中乃一二の者あり

日本政府は終るに決定を執りハ正しくハ  
 一レ、マリーエステイ上の政府に由て其官位  
 小一致し且つ是班牙及び日本の臣民は永久

此親睦と利益ある貿易の免許を隨に得る  
 ものと欲し他の條約を有信ひし國々と同格  
 の條約を有信するを以て江戸に一全權を送  
 らんと欲を企てを一時あり但し是班牙  
 の臣民は特に其永久の親睦と利益ある貿易  
 の事注意したり是レ是班牙領中大切あり  
 國地の一たるペリピン諸島ハ日本の隣國  
 として双方の產物甚多く且つ種々の物あ  
 るに由り

然れども日本政府右の説明をあたし故にハ

レ、マリーエステイトに其名代人の死達を延  
引する事とを決定したり然れども日本帝の  
明かす政府ハ外國人との關係に於て其群臣  
の隠護を保する事とあるへり以故に其政  
府諸の證據を見せしむ法案を用ひて群臣の  
邪說を消滅せしめ兼て群臣の暴虐に騒動を  
する事とを制止し其國帝の法大國の君主と共  
にありて盛大の約束を尊奉せしむるをメ  
的當なる威權を用ひて之とを望む也

日本も今ある所の異常の擴張相當の威權を

る人々にて建てるを消滅せしめ時又ハ其間  
にても日本政府他の國と新しき條約を締結す  
時々日本政府は班牙も其求むる非禮を  
おさけ同様の條約を結んで之を拒まざる  
へし蓋しハレ、マリーエステイトの政府は石  
霸獨立の國民を有する所の双方同様の叮嚀  
ある事及び是班牙ハ「セリピン」諸島に於て  
日本と隣國おれハ他の國民よりも先き之レ  
を撰ぶ蓋きおきとも方今も他の國民と新し  
き條約を締結せしむる決定をハ是班牙にて

之レを尊奉する一證を與へられハ遂又双方  
同様に叮嚀ある事を以て誤らざるものと爲  
日本政府は希望するなり

若其間ハ是班牙船日本の海岸に於て破損を  
るものとあれ其乗組人々千八百五十九年ハ  
ビリビイニ諸島中の首府マニラに於て見た  
る難破せし十五人の日本人の如き同様の取  
扱を受くるものとハ「バレー、マレー、ステイト」の  
政府は終る歎ひあり此事を其時帝國政府は  
之レを報告し且つ其乗組人及び船長其船

事得ある所の諸物々禮儀ある國民中より互  
ひに待遇する法律不要を如く是班牙國に  
送らる處「バレー、マレー、ステイト」の政府  
は常に難破して是班牙に至り又ハ其國民と實  
易とするは是班牙は是る所乃日本の臣民を  
惠みく強く之レを待遇する如く日本政府も  
之レと同様の事あるを認し得るなり

余今帝國の外國事務宰相ハ其輪談書に四著  
として上は述ぶる所の法律を類知し且つ此  
事ハ然る其宰相の説を余は告せん事を是下

にふふ

余先づ忠實ある間々のため、に「メイ・ン・ヘール」ミニストルにおる足下と拝謝し、謹て余の特異の尊敬を足下と謹とあり

エス・カルデロン・コルウンテス手記

日本在留合衆國のミニストル、レシデント等々々

デシ・ヘール・トウシセント・ハルリス

亜國公使に

貴國より二月十八日附書七号に書翰を西班牙

海舟書屋

國外國事務宰相より其評に寄贈せし書翰を  
沃文とも藤子披見要曲其意を領せり右を兼  
而其評に周旋により我國に未だ交際ある國  
と之新し條約有結ぶる所ありと云ふは  
色し一范ふして深く感謝を有すは右西班  
牙外國事務宰相書中より類よりと云ふ既我國  
に於て然し其役長に用意も有る即ち要其評を  
中達せられし類あり是ハ見合ふとの由平  
竟其評我國に事情を察知いふされ別白既意  
と有故に周知されハ右等と知合ふと到らる

其通一統而自餘國之連也同根承引之人本  
 更之競如一日雖也而於此上之也一統周旋賴  
 入公界之大君殿中而公上之及定而滿望之  
 一統思之也而將西班牙人民我國地之漂流  
 之勿通通海而之強破取等智之若相當之憐  
 恤之如一人事之我國民連也同根之愛之互  
 之愛之自來書之通而通之通之通之更之異  
 外而此ハ其其名同國政府之通之通之通之  
 一統此後若書之通之通之通之通之通之通之

久世大和島花押

海舟書屋

安後對馬島花押

島津和泉藩士ハ中洲ハ書身

去年外夷通商津免洋已來天下之人人心  
 係記各國有志士之相唱也者其尊王攘夷也  
 一一慷慨激烈之流也四方心交之信也不容  
 易企及也其相向也其當國之有之者其也  
 其相交也其書翰波渡等以之其者其也其  
 其畢竟勤王之志感激涕洟より其振之次其  
 其公其其其其浪人其其其其其其其其其其

而之當國之禍害之勿論

皇國一統之騷動を賑へ終へて群雄割據之形  
勢に如り却て外夷之湖中に陥り不忠不孝之  
徒上参て別而不懷柔之存心拙者美

公色之沛為柳不蘇之類也。有之。以。一。付。以。來。高。  
面之。而。之。右。板。之。者。在。一。切。不。相。交。命。令。一。隨。  
以。周。旋。有。之。度。事。一。以。若。又。私。一。義。也。重。人。一。致。  
交。涉。一。強。者。在。八。有。板。一。中。以。以。其。以。一。意。  
一。以。何。板。版。在。一。波。不。應。以。在。社。若。之。道。中。而。且。  
江。戶。端。品。中。右。件。之。者。在。波。推。系。以。共。私。一。面。會。

海舟書屋

[illegible]

成三  
月  
十  
日

同年四月、旅京、昨、去、深、余、あり

獅子王院宮

自今正免永繫在為青蓮院山門跡隱居矣  
因以卜平生之通心訖不及此遠矣

啓司入通准后殿

通治左文臣殿

啓司右文臣殿

自今矣 凡以下万幸幸也 通正心 以不及  
遠惠者

才、於園東

松平肥後

以來至三 凡用向 中 漢 公 昌 度 之 壹 城 相  
漢 公 昌 度 名 氏 作 也 之

海舟書屋

右於黑書院亮中列座和泉昌中漢之

誠若昌養父

松平春嶽

以來 凡用 向 中 漢 公 昌 度 之 壹 城 相 漢 中

中 漢 公 昌 度 名 氏 作 也 之

右於白書院黑書之松平院亮中列座和泉昌中  
漢之

是

久世大和

病氣之身同有振子二月同列九道中國八月  
 孫之級之及 沛磁公二月胎子掛沛國益  
 小之法掛外國小用而振茶  
 上京沛用之殿 沛免公  
 右之級寺法事乃大目月所奉乃小即是事乃外  
 國奉乃小目月小即是吟味役江達之事

四月十一日

安後對馬島

加判之列 沛免酒同  
法 作付

海舟書屋

鴻津和泉系故二日建白

世長同東一也府任公級意長向去二年以來  
 順理大吏資系府為智進小獨豫之沛孔且而為  
 曉失後不知不仕公而之不相叶用向者之節  
 小度公以凡內更之 公武沛合卿  
 皇威沛振興 幕府小要革正為在公振仕度不  
 孫二小度公在世家去一朝一夕之本三之之  
 二年以來 幕吏在  
 初渡也遵奉不仕外吏通高免許仕剏正談之親

王公卿士皆一稿尾張水戸誠亦其外有志之大  
召悉摺調仕庶人ハ死流之刑ニ有以ハ其心  
正為惻

宸襟ハ以撲振傳義仕法固之人心終亂浪人  
尊王攘夷也誠之張慷慨激烈之說を以交之四  
方ニ依或ハ大老を刺或ハ夷狄を戮ハハリ  
幕政ハ有緋之嚴命を以ハ其心奮發仕進以  
相成殊ニ増長治之終ニ不容易企ニ及ハルニ  
相成中ハ右ニ通ニ有之

皇國一統賡記之基ニ相成勤王之義云ニ不相

叶而已ありは却て外夷之洲中ニ隔リハ其ニ  
而實ニ以ハ不ハ治事ニハ度ハ其心奮發者ニ也  
其心奮發ハ以ハ三百年來 德川家より幕府恩  
殊ニ亡兄薩摩之亂終ニ其國政之長ニ有之  
天朝幕府之ハ其志誠に述轉ニ其力仕ハ其  
分而選托ニ其心義后ハニ其心次其傍觀其  
ハ其心不忠不孝ニ其心道ニ其心考修其大吏中  
後是則國東ハ其府不其十分速白仕ハ其合  
先月十六日國元發是當月六日播州府路其仕  
ハ其諸浪人共進ニ上坂松通ニ其相待事を記



同年五月大東三征為 初使下向之時別後同人之故余ハ  
敵意ヲ致

朕國家之為之日夜ラ思ハタス以而て幕吏苟モ安カラ  
ん事を偷む依て方今汝を関東ニ下シ遍ク

朕ハ固有之志を字月ニ知リしの人と欲以頼クハ汝

朕ハ腹心と為て忘らかり也且營中腐落ミ日第一幕吏曲

盡心あやまり島津と争論ミ及ハん事も測ミ知ラズハ

汝大道を以て是非を沙汰シ天下ニ大事をあやまりしむ

るかり也今日ミ事

朕一ツミ汝ミ仰たぬ汝つと覺て

海舟書屋

祖神乃 宸怒を慰えよ

同月師別度達白

不肖ミ私不睦 沛大改被是中上ハ版々奉召入ル汝ハ南

今門外ニ出所重公平ミ二字ハ專智と名好ム汝ハ 沛通

親ニ相列露立旁城組ミ罪を不睦見返ミ次者中上ハ出

忌諱ニ觸ル事ハ汝ハ汝ハ汝ハ汝ハ汝ハ汝ハ汝ハ汝ハ汝ハ

天下ニ形勢且暮ニ變化シ 幕府ミおめて沛水ハ受させ

られん汝ハ在外患ミ事ハ

神祖 沛貽謀ミ沛意表ニ出ル事ニ向日新究理ミ外夷ニ

對し膠柱到舟之注を以て強く強らハ交易通商は許  
 々素より此海を以て本とす故に其を是也外夷は其  
 或は正人之道を失ひ彼より中土ハ預節を何事によ  
 らん道辭を以て固く拒む成再三中暮ハ  
 至てハ其の振波。好意を以て許す容相成日幸  
 海唇極要之地所悉く巨大之港を固ら其猖  
 獷之情態人々痛嘆ニ堪へ畢竟  
 公方極力續。清代相侵ハ清政府は多端に  
 時會自能同循苟且之策ニ出ん其本に實  
 々嘆息之如ニ堪へ其形勢よく推移

公注を以て腥羶之域ニ趨りて中ハ既ニ江戸  
 表ニおろし度々之狼藉も有る猶又

輦轂之下ニ浪士聚嘯いゝゝ不容易之事情中  
 立んも全く人心を不服ニ起りん其之事情ハ  
 此度

初使参向ニ付而も

物從之清言極々素より孰れも密に其意を察し  
 外夷は其振之勢ニ付て

敵愾清不滿之其も其為有ハ其ハ風向義知  
 仕ハ其も自能右等々事情ハ作進ん其本に

身好公純にわたりハ 公武に和不和  
 皇國に清安危を極小一大事に幸好公純にハ  
 此處にハ一巻添く 清思意を公純廻  
 廟堂に清謀識勉めて公平極安に道に安され  
 公板不肖に私玉願不過に幸好公純大来に宿  
 弊を除き十年来にハ要重に一新に天下を磐  
 石に望き小措に公窮に回運に公保ち公純公  
 有金此機にハ度公將又 公武に確執を生に  
 慈仁に純此を醸に回機を解に足利氏に覆  
 轍を踏にら色にハ此道に下守に度公作に預

くハ非常に大典を以てハ非常に人材を選れ  
 清國政を更張に為人の眼を改観に永に蒼生  
 に望炭を免色にハ上公  
 宸襟を安んじ幸に次  
 神祖に清遠訓を傳せらるるに公純上  
 清忠孝に幸好公純尾張版元伊版水戸版一編版  
 尾張版中興に版公純同版板に登 城公  
 作身好意に次公 清身好説にハ公純談に公  
 有度幸好公純に 清一門にハ一和に天下に  
 安全に公純にハ公純に松平春嶽に委任に公純

之實二由的當之亦好公其外松平岡更之實明  
 之國一有之時奉二使達之者二公上為時限在  
 之身分二公治之國東之公在寄津參謀之由  
 一即二由由之使奉好公後堂和泉為伴達春山  
 等亮使之者一之國政也彼是以屈公額二由公  
 以之平素好之登城之伴月何角津尋等  
 亦為有公之自能諸有司之風儀相改り之由公  
 加賀薩摩仙臺之巨人之雄藩入一之東西北小  
 島崎一之全國之休戚二由係り公國柄故別一  
 之津優待之由品公為主一之治奉好公其他五畿

七道之大小名長州肥後筑前安藝備前同列土  
 佐有馬米澤柳川等之治免執也之時奉慶喜い  
 多之者之有之為受公治之得失利害  
 津尋等之伴甘津勸奨之由公之治之治奉  
 好公之由由治之由之有志之者之數多之  
 有之公同治之津尋等之由之由之治之治奉  
 公水戸故中綱之殿松平故薩摩等之不允之文  
 藏有之公人故在世中達白治之由之由之治  
 之津料物之由之由之由之其勝故江川之治之由  
 故向山源之由之由之由之其勝故江川之治之由

建云云周云云定而更漢也云云  
 方々爲事爲人云々姿々全國忠義之氣を鼓舞  
 一葉福の取用云々抱持又終 廟堂精々沛参酌  
 云爲立勉のて公平酌當云々此道云々一帰云々  
 治云上 天子云々下爲民に云々近御異論云々  
 生云道理も有云々爲公私云二事云治記  
 云根源云々又云々慎云々畏云々云々此處云北條  
 時宗身云四位云云云々外云蒙古云漢敵云  
 挫云々内云衆情云漢粹仕云々金云要重公平  
 云起云云事云々後代傳云々更漢云仕云方今

海舟書屋

天下云此勢を以て 思云云此事云何云々  
 云々此爲遂云云然云々却云波り功名の云々屈  
 云云此云云無限沛口惜云々此事云此處云爲  
 此等云事云 沛感激云爲云一層云此爲重云  
 道云此爲得云云云  
 皇國云勿論 沛威德遠く海外云云溢れ云云  
 云云云々云不肖云此身云云顧み云々暫思云云  
 説事讀 沛同云此ハ事云入云此云臣子云  
 云此托人云憂云云此云々尚又愛見云次身云  
 中上云

一世上之風國美公愛

皇妹降嫁之上

公方極沛上治之必抱於京師也只愛沛金也

為立公即之飯北車公武之臣英車一也

君臣沛婿留之沛間柄也之車一也

聖降之夢武家未曾有之盛典也

沛當家之沛采花沛而目也為施也也

幕府之有司大小侯伯士庶之知也近被欣折舞

之懷仙車之過之也依之降嫁之也上ハ速

沛上治之抱沛親友

海舟書屋

天顏之降之也沛婿留之沛間公武之臣英車一也

在厚之也外夷國漢之沛意味也

益忠孝之沛道也之也之也

大猷院極沛已之沛精神也群下也

也之沛之也世同風國也沛降嫁之相成

仕人者也而附之也之也思也其也建也

仕由之也取也中是也等也件也内也調等也出也

故高正月十五日之新軒飯書也之也方

今外夷稻飯之也之頭一海防多虞之時舍也

り遠之久廢之盛典也之也之也之也

文之此經費莫大之此軍國之此緣偏小之國  
 係此之存此其外大小名之羅敵宿驛人馬之  
 勞擾也如何計之存之此且外患孔熾之此之  
 此軍艦其外器械之此製造此臺場之此築建  
 大小砲之此海遠此旗車此家人之此官報等最  
 緊要此專習之存此此之此令如何振思在  
 此此之此 沛上治之此率當時此此之此  
 相成此若又強而此此此此此此此此此此上  
 此此軍國之此緣偏是之為此廢缺一此此八萬  
 之士此此此此此此此此此此此此此此此此時

八一敗金地之此形勢之此度之此依之此姑三四日  
 此之沛延引之 作此右之件之逐一  
 沛奏同有也之此天下之為此 沛此將也此奪  
 此此歲沛武備元實天下小國之時是待之之此  
 此此此此此  
 一京師之此進之此此料此之為此中上之此之  
 此此度之此此此此此此此此此此此此此此此  
 度此之謙倉已矣天下之萬機於此武家之此之  
 之此此此此此此此此此此此此此此此此受  
 沛所向此此管其外沛用遠臨時之此為進之

以凡十々年来法物に價翔をし下り不中若  
 く之舊來之清高にてハ清飲之に事つた爲  
 之に之を喜ばし何卒舊來に一信之に増進  
 以板相成ふに由るに道と事好ふ  
 一王室清代々山陵を泉涌寺に收之外彼古遷  
 都之に事なく有ふに故五畿内を定む或  
 湮没して其不愛を失ひたりふも有ふ式に相  
 成ふ以凡別ふに洋物に典相以てふに板に不  
 幸何に是等之に事ハ實に

皇國忠孝節義之氣を引起し以て其基にもの有

海舟書屋

之に爲る何卒國東より時々以て後等之に世話  
 有るに爲る立威時 清洋物招ふ清礼も以て此  
 祖宗在天之靈を慰められぬ  
 清祚運出長久之基にもの有る 立之に事好ふ  
 一方今海内物騒其根底を勘考仕ふに要畢竟慷慨  
 氣を相唱ふ浪士は強く外吏之猖獗を憤嘆  
 清一多に彼に罅隙を生し 廟堂之清策を  
 して心攘夷之に要す不帰を以て之をく好む  
 より起るに爲ふして其跡願ふ不茹食不類  
 以て一に兎角身命を擲 清國體を尊崇し以



と海に面するものも、その土地に於ては、  
 市面を以て、  
 一五外國に二ストル館に、  
 相成此、  
 右土地、  
 其元、  
 全國人心、  
 昔年、  
 揚州、  
 沛威、

海舟書屋

は、其、  
 戸、  
 右、  
 之、  
 上、  
 之、  
 多、  
 容、  
 等、

以之右端而由斷二相成外以端而由貨酒二相  
 成以以之右端而由斷二相成外以端而由貨酒二相  
 交易仕以之右端而由斷二相成外以端而由貨酒二相  
 國平後也求以之右端而由斷二相成外以端而由貨酒二相  
 義代之以金則之安危二相成外以端而由貨酒二相  
 之漢列仕以之右端而由斷二相成外以端而由貨酒二相  
 我駭記以之右端而由斷二相成外以端而由貨酒二相  
 之之品之品喝之之右端而由斷二相成外以端而由貨酒二相  
 也皆先兵端也個之之右端而由斷二相成外以端而由貨酒二相  
 以以之右端而由斷二相成外以端而由貨酒二相

理也分明日一中論以以之右端而由斷二相成外以端而由貨酒二相  
 地日上之沛殿山於又其後嚴重二相成外以端而由貨酒二相  
 咽喉之德街內海山臺端之牙城之亦一親藩之  
 門以以之右端而由斷二相成外以端而由貨酒二相  
 替地之義之亦所源川小名木川之之門之於地  
 地以見立二相成外以端而由貨酒二相  
 人心也釋之沛殿令以之右端而由斷二相成外以端而由貨酒二相  
 一之之且假令非常之異變以之右端而由斷二相成外以端而由貨酒二相  
 臺端之之沛殿令以之右端而由斷二相成外以端而由貨酒二相  
 害之相成外以端而由貨酒二相

幸好公若又車柄を分ち論一ニ相成りても  
 一府の許容を原を以て外夷兼代不仕の故に清  
 版山を美を其後建通の通止 作付直右通信  
 と地勢小高き要ふあり一二ヶ所に見立ニ  
 相成ニニストル館に信一の器振る物に直達  
 ニ相成来生彼の館中を見おろし道一其松子  
 を探索いふ一万一変来山度公故を速し此要  
 うり彼后彼へお入の形勢を示しニ相成且  
 二お振造うり清版山の通路を後ち裏子田  
 面より迂路一道を残し直に清を何となく平世

彼の驕抗の氣を壓し非常の要害に於ては  
 此の論此の論ハ何ふ此失費莫大なるをく公以  
 ても前文に深川小名木川の地の要は遷し  
 美精の論一で論を好む

一都下の人心何となく外夷を忌怖し 清廟議  
 も亦随て姑息因循に彼を兵燹を同くの虚喝  
 常に貪婪を縦に是の根本に相成客主の替  
 要を換へるも今 清府門土地の形勢は百改  
 なくし起りつと幸好公の然らば令列の士氣  
 を鼓動し兵制の一変あり外夷防禦を清實得

正為 立の字ニモ 津府内之に候振替内海  
 之に候向等由要至方之小一有由度其仕法  
 之左ニ二件ニ帰一之申之申候由  
 其一由兼由京川別所より起り六ヶ所之に臺  
 場由築建由度由之玉板之由砂築ニ由深才威  
 腹由取有右由臺場計之要少之由外ニ由備之由  
 品由之由取之形體雄壯ニ由取有畢竟由實由  
 之由相成由為要由之數百萬之人力也費一  
 由取建由 作由之由其奉金之至らさる  
 由有之由取之由等一由之由一由之由尚此上

四五ヶ所之に臺場由築建ニ相成之由取有  
 隨由内海之形體京川より芝道通ハ六ヶ所之  
 由臺場由之由候成之由一由有之由取有  
 洲由島深川迄ニ至りて之由一箇砲之由備有  
 之六ヶ所由臺場之彈丸も及由中由為要由  
 由深川洲湾由島深川迄ニヶ所ニ新規由臺場  
 由築立ニ相成尚又中川刀根由有之由川口由  
 由臺場由築立 作由之由取有内海之形體其  
 由改由之由持角一由之由實由相立之由之由中

其二々右に通り臺場は築立に相成り此に  
海に防禦は望固に安に此に 津府に立  
誰に地もあく人家稠密に有るに而も非常事  
変に御前下一時騒擾に彼に火攻其機を以て  
り之を察し此に品川津邊山より起り深川洲  
渚に至り近沿海に地武家所居を分ちて於て  
土地の形勢に隨ひ幅四五町或は十四五町に  
反拂に相成或は茂林或は竹藪或は溝渠池沼  
深田の類とかゝ或は溪谷庭に左右肝要に場  
所等にも高又此臺場は築立に相成り此に自

此に警備に人教も省ち於て士卒を以て挺要  
に地を守り此に相成平生に此に冗費も大に減損  
仕つに之を察し此に隨て此に反拂に相成り替地に  
養は青山四谷大久保王子湯井に造り此に  
法大石に下屋敷巨大に地有るに此に刻念を  
以て 石上其地に之に移住を被るに此に大抵  
相納りつに米穀法に運漕等難に其道相  
主つに之を察し此に此に人心自治法靜に  
廟堂に此に築略も右に準して此に此に此に  
此に名早く海外に夷に之に此に此に此に二々

條々頗る巨大なる所並にて多分なる失費も  
 一方より此方一兵臨相固らけり時々  
 沛府同百万之人民塗炭に陥りぬ而已あり  
 此失費も又百倍に消費唯今迫る形勢に於て  
 此以外更如何振う志願しては固屈の外  
 此道にありざる處と幸甚なる返りくも此所並  
 る品を爲す立腹甚だしく

一惣體都下之人口衆多し過ぎ元禄年間と比較  
 いより此方十倍ふりありて中々畢竟太平  
 る餘凡して只管繁華富實と誇り世界を一古

今稀代おとやありぬと婦女子の浅見にて  
 實に海内羅弊物價騰涌之根幹に此處に富實  
 繁華を思ふ事ハ此より此方人皆安逸小耽  
 り易く法則僻遠より土氏一より江戸に至る公  
 雇住等いより此處の多分田舎より辛苦を厭ひ  
 此より都下の居住を望み中々是よりうりて逃  
 るの情氏日増しに強増し只に驕奢と風習を長  
 としぬ右に對する人家も進々稠密に建續  
 自他大失火も頻年々相成貧民乞食も日増し  
 多く相成實に方今江戸混雜之極と幸甚なる



怠らざるを以て士氣自倍し鼓動して沛  
軍制實地ニ相立つ中ハ此等亦頗る重大なる事  
件として寸指し争ふべき事ニ至らん故に其大  
概を括りて一々沛軍制之發を中軍先鋒後陣  
或ハ沛都城之固め或ハ其臺場之要害に  
地は偏急援之沛軍海軍等之出来振一二方之  
治平或百餘年外史以来之後僅二十年内  
外之事は此の如き列國之諸藩中又ハ士氣興起  
以て其向も方らん故にも抑あへて全國之  
武備を論はん故に必あり

公急を身始廢弛に振るとも中江船主は  
豫本以下諸組輕卒小至迄舊來より定む  
て古來の如く人馬を出し何等も用相勤  
めつ中といへるは規定は有調ニ相成の上  
舊來より法よりハ二三等は地の相成起り  
至用之雜人を省き或る貿易を求として沛軍  
制は一變を誇礫る三等に分ち親軍宿衛先鋒  
遊軍海軍等支は其後向を定め其外は藩代外  
振る大小各執事も頗固く軍備海軍之警備  
有らん故に江戸表におゐてハ別派其より大

小ニ熟シ主府家来リ同非常ニ砲台高志万石  
 ニ身テハ士分何人足程何人軍馬何処ニ割合  
 を定メ指知ル概ニ作付時向テ於  
 公色合シテ一軍ニ此制度小正威重猶又此臺  
 場等兼ヨリ預テ相成居向テ矢張是道ニ通テ  
 作付並其土地ノ大小形勢ニ準シ相當ノ実備相  
 立ル概ニ設テ平生演見何人教操練ニ次付此  
 取調小相成古等規則此一定ノ上ニ操練軍訓  
 行ク上覽モ此作付漸ク斟酌講究シテ此  
 世話怠ラセラセ此概ニ於テハ孰モ精明ニ

極ニふリ此武備充實ニ仕テ亦此概ニ於テ此  
 上猶關八割ニ此取調を始メ京大坂堺伏見京  
 良長崎新潟箱館横手等ニ至リ迄  
 没来リ此制度此改正ニテ是求ニ此概ニ  
 此叶此時勢ニ亦此概ニ此概ニ此概ニ此概ニ  
 軍備ヨリ此概ニ此概ニ此概ニ此概ニ此概ニ  
 此概ニ此概ニ此概ニ此概ニ此概ニ此概ニ  
 一海軍ニ此概ニ此概ニ此概ニ此概ニ此概ニ

皇國全列ニ安危當今最大ニ此急務ニ此概ニ  
 其事誠ニ不容易ハ此一此此此此此此此此此



以以之由法令を嚴密に定まらるる或ハ由廻  
 米を運漕し或ハ武家町人など其法固運漕  
 之諸物尋常之先淺く減し由積込し等々相成  
 以以之自然 皇國之形勢海上之難易に熟練  
 有つ時時として由魯西亜之地境を巡察し  
 或ハ朝鮮之地廣東香港之色呂宋瓜哇等法島  
 をも探案巡行し我より交易之道を開き以  
 之由償之通も相立富國之由一隅にも相成つ  
 中にも其由

一 其二 全圖之海軍整ひ海軍之由警備通し相

海舟書屋

主つ中其々五畿七通之地一通毎に造新場諸  
 砲局何々而も由定め置 作付新工を始め法  
 職之者並陽習熟ししに其々外國巧藝之者  
 尤も由右等し相成砲軍艦之製造より新上  
 の法測礮臺建築之法も分布いふし其由全  
 國之由守備相立海軍も漸く相備りつ中其々  
 存以能而も造新場諸砲局之其五畿内にて其  
 大坂兵庫堺之邊に由而も立東海道ハ江戸表彼  
 府尾張北陸通も其並加賀越後東山通ハ陸奥  
 出羽南海道ハ此并其順國所彼其地山陸山陽

西海之海道もまた大藩之向小おのゝと一途  
 毎日一二ヶ所宛に販立に相成り國々之貧富  
 分限に應じ或ハ外國より調上ヶ或ハ自國に  
 おろゝ製造いふゝ大凡そ此取極り小お  
 のゝハ右之姿にも由定め此 作有るゝと此  
 計と考知ん

右中上の件に極め之通腐之常後、此症の上事  
 實に當り通達し風評を取用し速に仕へるゝは  
 症の治を傳集謬誤も定く此症を急ぐゝ此あり  
 り最初中上の通り 津通親にも相列存主の身

分、此症の自國政事も以属棄ん不肖を不顧  
 身中上の芥曝之微表 津藩密に成下長古之罪  
 津評容に下んを秘有考知ん

戊五月

松平阿波守

五月廿二日 上意之類

近來此政事の如息、流れ法事虚飾を有俗に  
 うり士風日之輕薄を培し此商家に此家風を  
 取失ひ以て外之参謀に外國此交際之上を別  
 而此兵備充實に致し以て不相成能るゝ時

宜：意一以由變革之而所變易之由制度實直  
之士風：後古い多一 沛國威相輝以故在抱  
度思在公為厚相心以心勵忠勤公

六月 上意之報

通事不容易時時：身今度改革向令變革以昌  
何れも為 國家厚相心竭心附以夢ハマ中園  
公於年為凡マ中談公

國持大名

山藩代大名

海舟書屋

外松大名  
厚之間法

菊之間法

中達の書付

今日 上意之報：以厚

思在國家之由慶幸証北上強有奉：公昇平  
張之百年其流變個化も相弛武備以仍屈：  
相成業公好柄通來外國之時智頭：以瓦渡  
乙相城古由而振振：自況相張：瓦答終  
了也

敵意ハ、至リ深ク思入

思ハル素、一、公武ハ同柄柳、隔意ハ

為主ハ、事ニ至ルハ、何と云ハ、此

實ハ通敵ニ相成ルハ、ウリイ、事ニ付速ニ

市上治万端、直ニ、事、作上、度、の

思ハ、二、則、此、月、ニ、事、作、出、ニ、相、成、ル、候

市上治、事、ハ、實、永、以、来、市、度、典、ニ、相、成、ル、ハ、

事、ニ、ハ、一、ハ、万、端、ニ、付、調、次、方、ニ、事、作、出、ニ、

ニ、相、成、ル、ハ、ニ、付、暫、ニ、事、年、春、方、ウリ、由、於、縁

相、願、ハ、事、此、方、ニ、事、ハ、由、舊、例、ニ、不、必、為、拘、拘

海舟書屋

外ハ省略、由、以、振、等、万、端、由、簡、易、ニ、事、作、出、

思ハ、二、付、急、ニ、付、調、次、方、ニ、事、作、出、ニ、事、作、出、

急、思ハ、ル、事、ニ、ハ、万、事、市、度、典、ニ、

思ハ、ル、直、ニ、事、作、上、由、合、神、由、熟、算、ニ、上、治

来、ニ、契、風、由、一、洗、由、武、威、由、振、由、振、張

皇、國、由、世、界、方、一、等、ニ、強、國、ニ、事、作、出、ハ、由、偉、業

を、事、作、出、上、ニ、

宸、襟、由、身、安、下、ニ、万、民、由、安、堵、由、治、度、の

思ハ、ル、ハ、一、ハ、何、れ、も、厚、ク、事、作、出、其、意、由、改、革

向、ハ、変、革、ニ、第、一、等、各、是、也、ニ、事、作、出、有、ル、ハ、由、

柳も不憚忘諱 國家より為す一は相心は  
心慮を以て之中上公格進之 作公  
公も之方之公格進也其意を以て之中  
忠誠公也

是日終系昨九條殿園白を免せられ近衛殿  
臨機に任せられり

六月二日

久世大和守

病氣に付山後清免に参り又相預公飯不得

海舟書屋

止奉に授け 恩衣候に預け通山後清免  
に同席に 作付心永に養生湯に氣分健長  
に登 城仕 市橋原相候に申合に  
作如に

同月十日中務大輔相酒

諸向より寒暑言物に参り門主に三家山あり  
之外献上残に之に参り望く相所更絶清なる公  
右に通一同申合に参り心候向に之に急度之に  
違ふ事

成六月

九三

同日左衛門督大原重德卿

詔令赴齋一東下其

勅諭一曰

朕惟方今時勢。夷戎恣猖獗。幕吏失措置。天下騷然。萬民欲墜塗炭。朕深憂之。仰耻祖宗。俯愧蒼生。而幕吏奏曰。近年國民不協和。是以不能擊膺懲之師。願降嫁

皇妹於大樹。則公武一和。天下戮力以掃攘夷戎。

海舟書屋

故許其所請焉。而幕吏連署曰。十年內必攘夷戎。朕甚嘉之。抽誠祈神以待其成功。昨臘和宮入關東也。使千種少將岩倉少將諭天下大赦之事。且告曰。國政仍舊。大概委於閔東。至如外夷之事。我國一大重事也。係其國體者。咸問朕而後議定。或使二、三外藩臣豫聞夷戎之所置。幕吏對曰。

宸意事甚重大。難遽舉行。請暫猶豫。既而頃日列藩有獻謀議者。如薩長二藩殊親來奏事。且山陽南海西國之忠士既蜂起。密奏曰。幕吏奸徒日多。正議委地。而蔑

王家睦夷戎物貨潰溢國用乏耗。萬民困弊之極。殆至受夷戎之管轄。不日而可知也矣。冀拳旌旗奉鸞輿於函嶺。誅幕府之奸吏。或曰為除太平浸潤遊惰之弊。誅京師之姦徒。又曰不顧幕府。下攘夷之令於五畿七道之諸藩。如其衆議畢出于忠誠憂國之至情。事甚激烈。使喻薩長之輩以鎮壓。其他召幕府老吏久世大和守。往復歷日未告唯諾。而先行昨臘所諭之大赦。大樹猶弱。何失之有。但幕吏因循偷安。撫取失術。如是則國家傾覆可立而待也。朕日憂懼焉。所謂偷一日之安忘百年

之患。聖賢之遺訓可鑑矣。當內修文德。外備武衛。斷然建攘夷之功。於是斟酌衆議。執守中道。欲使德川再興祖先之功業。更張天下之綱紀。因策三事。其一曰欲令大樹率大小名上洛與公卿大夫議治國家攘夷狄。上慰

祖神之震怒。下從義臣之啟嚮。啓萬民化育之基。比天下於泰山之安。其二曰依豐太閤之故典。使沿海之大藩五國稱五大老。為詔決國政防禦夷狄之處置。則環海之武備堅固。確然必有掃攘夷狄之功。其三曰令一橋刑部卿援大樹。越前前中



之内既也有りとも 沛通奉公の如く名は  
 作進の由取知仁の右も何とも重くは事柄  
 として不肖之親とも根に論議して仁は之を以  
 治に既し 沛上洛之賢に付てハ先達見逃し  
 録中上の賢も有る 沛要重なる尚書に由てハ  
 天下に記根共相成の事なるを留め奉り  
 沛程の故も奉り入の記に尚又不肖を不顧給  
 号に録中上の賢二策  
 初設に沛程豊臣家之制に倣ひ海峽樞要に五  
 大國を置らひ五大老に職を命じられ海峽防

禦外夷攘斥に 沛要重なる尚書に由てハ  
 いさせられ其通に之よりとて録に相成  
 へんがに法平打續法事姑息因循して醜虐跋  
 扈に此を顯しは二月達し全國に沛程相主の  
 を 思ふに此は是等之由事と記されぬもの  
 なる事柄の由程第一に法平打續に由て外  
 夷防禦に由事と暫らく海内之形勢輕重に推  
 度せしむ或は尾大不掉して  
 皇國に記此程進さしと有るに事柄の即豊臣  
 家之二代よりして滅亡ししもの畢竟秀吉卿

卑賤より歴登り天資英邁の氣に任せ渡来り  
 利害を不顧大小轻重を計りて一報に英雄  
 豪傑を高官に任し大回を討しは是より五大  
 老の權勢互に相殺ひは極成終に國々系を  
 一戰を醸しは事は此處に  
 神祖の大業を神親安に於列國に度伯臣外親  
 疎相錯り大小強弱相制しは極深く  
 神慮を慨されは事にて六十餘州相維持し  
 二百有餘年今日に到り天下大平之恩澤に浴  
 しは事は此處に外夷溢来り蒙之は其に千

海舟書屋

百年に到りは事は此處に  
 内々外々ハ當今外夷防禦に事は此處に  
 く憂ふべきにハ五大老の才を以てハ同り中  
 内々外々ハ此處に事は此處に  
 り領國に依り上下海外に事は此處に  
 將略を比較して離合強弱に實理を以て以て  
 士族客に巧辨を以て  
 天聰を以て勤王に事は此處に  
 五大老に一事敗證既に如斯にハ上ハ此處に  
 初設に神祖に神逆に事は此處に

天下之大平をたもち蒼生を撫育をす  
 思ふに其の法を清國に上りて理ハ  
 清立つて其の既一策  
 清上治るに依る先達中上に通る事  
 五丈をす一策亦如斯く  
 初令三事を門啓す 清國奉不  
 必の叶わぬ三策をす 一方をす  
 一事をたす  
 初令をす 清國今も如く 清威元陵  
 通一藩封を諸侯尊

王攘夷を説く主張仕る者多く  
 主上も 敵意をす 清國は  
 清國政清挽回法政は変革を  
 若良を清補佐不 清國は  
 や 清國は 婦女小人を口舌人心を動かし  
 金を道傍に築き三年不成と古語にも  
 如く清國置苟安の流を清國は  
 如何に 清英明は清國は  
 宸襟を安し清國は 清國は  
 て 清中興を 清國は



任之蒙り天下諸殺之沛改由改正と中事ニ  
相成ル沛也

公方振沛英明之由同へ兼て天下ニ其

沛弱齡小して沛憂慮之福由人心ニ通徹仁

后ハ奉故凡大小侯伯親也

此君之役ハあり此君を輔けし

沛國傳を寛永と由初先と挽回し中歴き大職

會之跡返敏敏扶蘇不仁者ハ有る為と事存

ハ此の時ハたハ沛上治ハ時日由指延

江作進五丈亮之沛事ハ此也作上ハと

海舟書屋

也

主上ハ亦不世也之沛英明ハして當り

同東沛侯頼沛國威沛勅與之托度との

敵意ハ顔ニ有る伺ハ此ハ必

和洋ハ此ハ在ハ事ハ若又沛上治ハ此

美ハ既ハ此ハ作ハ一楊殿春嶺東と此ハ

城ハ此ハ作ハ此ハ事ハ此ハ沛補佐也

作ハ此ハ同振ハ此ハ有ハ唯五丈亮ハ此ハ事ハ

ハ沛斷ハ作進ハ此ハ有ハ名正實ハ此ハ事

ハ相成ルハ

初使遠く東向く其の畫餅と等しく薩州長州  
 とあるが其の終りの點は、一とく、然らば  
 國の浪士益降死して幕府法方同く罪を爲し  
 利害が下は假使に恵方へのみ、あつて天下  
 とは、大衆は是より其端を固りき海内瓦解  
 勢ひは成りつらん此時は及んで臍を噬み天  
 下を治安を望みんとも再び其類は有る由  
 く返くも極東、神守坂下等々狼藉其外法蘭  
 西浪士類を以て志を同くし薩州長州を以  
 て之を法藩と讀み

初使東向等人心に憂慮を一朝一夕に奉る  
 らば不容易世上に奉る、此の故  
 清賢案は、立世  
 初余は、此の故、神守坂下等々狼藉其外法  
 蘭進、清を以て、此の故、一とく、然らば  
 清進奉る、立世、此の故、列藩に憂悶も自ら解け  
 法蘭西の浪士も干渉に武支とあり、公武並に  
 合體、清國情は、更張に清基を固めせらるる  
 とも、亦、此の時、と、奉る、何れ、とも、清國考  
 為主、清國考、將又、外夷、此の故、一とく、然らば

と真之

初洋ニ至之 幕府一時之推道小之法有司始  
息之長を遂之由事ニ由る若く之如く長満之  
一港或ハ稍狭之とも之西港之交易を許し餘  
之津横絶つ港杯中唱之向方之由之既之  
畫一之約悉く定まり一層如斯由取法相成之  
勢を今更之由事ニ相成之由之全之  
皇國一定之津改法至之とも以之由且彼亦亦  
海外各國之交りを依之由直之二字を以法判  
之根據といふ之由事故いり之由攘夷之説を主

張仕之共之各之津打拂之却之

皇威を墮し又

皇國之蕃之さる之も之り之と之好之  
へ之是近之開之さ小相成之諸港之之ハ先其  
依之由指之相成先達之由之ニニストル銀  
之之を之之先之由之開之さ之と相成諸港之  
固之由之由 作之且之丑甲寅己未内外之由  
不之さ之之或之姑息同循之或之一身之利  
名を謀て後来之文害を顧み國家を此極ニ深  
り之者之と大小法有司之高下を之之能其

曉更を察し事跡を極め刑賞の典を西へあさ  
せり是れ治也 沛威令自内より外更に針砭と  
なり

皇國の沛信義亦海外に明らけよして兵端を  
固りき戦を合さるの由來ありはとも

沛憂を道相立つと事あるは時ハ

沛國力沛元實は武備相立は近彼等を都貢

輩に等しく全く 沛壯絶不為立はとも

沛國體ふあはく沛崇卑有る處と事あるは曾

く内外の地圖を按し且地理誌を類を閱し

ふふ

皇國に如く尚武の國柄もあはく亦二千年來

一姓に

皇統連綿し比類も實に乏しくは彼も亦帝

を祿し王を唱へ願強大の國多しは彼を知

らるべきを計らば一概に説きの帰しは時ハ

沛國威を立んとし却て沛國威を墜とす

至り終にハ二千年來連綿し

皇統不測に沛災厄に掛らるる處も初に

大害引出づる計はる何ふも能實理

在講明立りとり法事 沛信義を失はる  
 り色以益 沛國威 沛振興に正為立る事  
 之五以透滞 沛英新に托寄る事是等之義  
 之悉く忌諱に觸る事に難し上は貴族に  
 以て 沛一門に端にも列し居る非常之機會  
 之臨んて黙止居るにも不意と存するに  
 微衷を包み上は誠懇に罪責ハ我重し  
 沛仁恕に正下は以上

戊六月

松東泊波島

海舟書屋

同月毛利彦建白

外夷諸國 沛國威更張之由不意に付而も此  
 様 公武沛合併に正為成建し 沛國威を以  
 定む成海内和武成海外に耀るに此正  
 作付の外方より受と存身誠懇に罪を不顧鄙  
 意中上は憂慮并に微志不意に捨て深重に  
 沛國意に作付るに誠意を存感戴深増不意止  
 事終る所堂上より方々追慕候へる故に中  
 上は憂慮多し由正為建  
 天朝今敢て献上するに此沙汰に吉なり

為立由以密旨作同冥加至極雖有仕合事  
尚又懸考仕之要不以此止也八也中私或外  
之身分也一也直也幸汚

天朝公侯亦必入八也極之要也自能列藩  
草莽之士所好天下之公論也極之事件也  
公儀也竟直也

朝廷之中上公而不若極心以遠自己之了簡  
以每之上書仕之極成以公而識見之不及人  
之小異有之也幸感

天極尚又 神列之清國神也豫舍已矣

海舟書屋

幕府也建在大政由委任而威重也二也列藩以  
下直也幸汚

天朝公侯也其素之得失也論也三也  
之 幕府也極成仕之節也相當也 清成光不  
相立也 幕府之清成光不相立也而列藩各

朝廷也戴也 初命也後 幕府也要一也二也  
惟劉揚之極也極一海內分裂天下之公論也  
若此之不立之幸也八外吏之極也招也

清國威及衰弱也而也也  
大將軍清成也上之

朝廷起以敬裁下以列藩以下以治國天下之

公論起承括公

敵意は通事に示誨し、其後取次成り、以て底に板  
下を爲す。此後八中上迄之數二も五の度々

丁巳為在比後ハ申上公迫之勢ニ由五山度ム

事  
二  
月

公方振沛國初之由先蹤起以到菡谿系

作月當時以初改二月天下以更改之思石也

以  
沛國神如  
何之定  
二  
一  
沈氏  
吾  
意  
一  
出

之音韻

叙意張成山

海舟書屋

初渡 台余起以 沛國威更張之 以復揚方之

此外有以爲已善此上豫矣此中

上或八  
淨國  
決定之旨遠習仕么者有之

h  
?

初誕  
在命  
之輕  
蔑任  
命  
之  
有  
任  
據  
嚴  
謹  
必

作符么 茂中么 有之 蜀 友之 李 孫 么 北 辰 篤 么 法

評議之上内邊之者正御同心之下公私之邊

上系仕旨飯大要中上么么  
下男内座

重丈之事容易之中以義子方孝思入以

神列內安危之境此一卷三有之八本元

已奉考公且最茶深重之 沛國意也月此作同  
至之養育二月不以此止中意公當之出座公不惡  
在國石下公以上

六月

松平大膳方史

七月六日

沛使服中昭大膳  
松平豐榮

一楊刑部以殿

右以 思在再相續出作出 一楊願十石石進  
今度以敵意正作進以二月日後是也 作如之

海舟書屋

誠恭与養父

松平春嶽

今度以 叙意正 作進以二月日改革係裁減  
作月

外國用立合之句  
外國本以 評議

薩州家より出公書付 中務大膳

抑琉球國之文之當家元祖豐後与忠久代より  
聘礼済来公雪九代陸奥与忠國代  
足利將軍教公金身大足身門跡義昭陸奥露

題曰別福禍之階。唐以前中外相與如市者元年三月  
誅戮之。其忠國蒙命義昭也。誠一右切又依而  
琉球國也。經り支うり以來隨近年に貢物名酒  
來む米穀を元來實爲令報調決て是後國柄故  
唐國と薩列は随從和漢交易し潤脚を以生計  
來以前も朝鮮暹羅爪哇等々外國にも高麗  
渡り江左遊々外國に通商し相安和漢通融而  
已免るるを以て此座

一  
唐  
永

皇國は海をくゞりて天正の時より朝鮮入

後進三拾年計酒後酒后公要商象十七代兵  
 庫以義弘朝鮮以征伐酒海之砲唐國より朝鮮  
 以加勢之入將茅國器弟茅國科也為人質捕來  
 寺澤志磨也といふ書に唐公要磨長五年後  
 東照宮極茅國科は順正下明國に送歸す象  
 作は身象來多系在右油といふ中若くは源明國に  
 送歸は以て皇帝を臨在欽不斜厚に餐慈其上  
 向後福列より唐永武被り薩州に居酒に酒交  
 易音<sup>と</sup>約定歸朝翌年約定に通唐永武被り酒  
 公要象列國に丹庭 equal 中若くは源明國に

唐不后唐永濟東之極東傳嘉丁疏莫鴻計二  
 宋組人教之教海賊船為燒捨也公於右更  
 不相知公於其後明國より琉球に使者を  
 派多末末右公に琉球に使者を公に預け  
 月琉球に使者明國に使者に及對談公に  
 通高取公被る公に海賊公に本に相知其後  
 解丹屈即四郎相捕其後公に上仕薩別於市來仁  
 意中何公其長十八代中何公家久代より  
 同人に之

東照宮極

清系

門出傳

白左京治后公に於

海舟書屋

柄二有之唐永濟東之極東傳嘉丁疏莫鴻計二  
 清渡之極東知仁公に於其後家久公に別白相捕於  
 琉球明國に使者に唐永濟東之極東傳嘉丁疏莫鴻計二  
 別通唐永濟東之極東傳嘉丁疏莫鴻計二  
 是品に清渡相等家久祖父三位龍伯より中  
 山王に日本一統  
 東照宮極清治世相捕公に為國王より琉球聘使  
 唐上末賀永久唐和通高之通相同公に於左の時  
 之日本相富公に計二有之身一琉球之使者に  
 節二有之音厚思公に其奉に要細直書也

以中意之此兒要琉球より

將軍家に聘礼之義三司官等不致儀代命令不  
守之節其由度に付依琉球討伐之義中上

西中河極家 台令慶長十四年丙春兵部省酒  
公要降伏仕に付其儀言上仕に要

清威不斜則清威狀に下琉球國永く高家に  
下意に名に作此翌年戌八月家久中山王召列

駿府に集上同月六日登 城中山王より品々

献上仕に要

清代初二早速吳國を臨み其國王を捕ふに

儀等無比類餉之儀家 上意同十八日此餐魚

清子極方仕仕跡を中洋見此腰物大小洋順に

作月同廿五日江戸に集上仕に要則

上使に成下同廿七日以 上使に米千依洋順

に 作月翌廿八日中山王召速登 城其義に

品々献上仕其後度々家久に為 石山餐魚其

上意に茶室

台德院極清子自清茶に成下清腰物清馬茶極

田に屋敷土洋順に 作月公左公と瑞國に長

東照宮極より必唐國に訪通融日如と唐に通

高之參五波頭之波才足音 沛溪公為立於山  
 口波河弓換 沛書書也以此作酒公身尚寧王  
 一 福建官人以此書稿於薩別相認琉球  
 より明國に在る其後年々薩別に唐紙を渡来  
 公身中古唐紙を賣る於長崎波交易公紙は作  
 酒公  
 皇國に唐紙通融を賣る專尚寧王に取扱  
 作身相國に賣る此度公

一 唐物高法を賣る右通を沃振に白嘉吉元年以  
 来勝手次第高法波来公身遊る此度錦を作出

海舟書屋

享和度以来を別白嚴發に作出道比に玉公の  
 長崎の高法方二層障の額を以拾六種に限  
 り於長崎表賣捌沛免に 作身取る此作酒公  
 額の度公身注古より之仕来に之此度公此左  
 更に於薩嚴密に有錦中身並公控向を兼白如  
 中上公琉球國を賣る和漢交易を潤助而已を  
 以生業仕来公土地柄故遠に難混相逼加え道  
 年外國紙換波来毎に繁に酒交珠に居留る  
 異人も有る彼是に失費莫大に幾に白強増固  
 苦に相迫り難免並國洋より厚技賜る商會中

附々其山座の故に因窮之餘自然人氣は中座  
 答の協合は初り商賈は後には是れ故に万一  
 外貨は相廉の故にも成立の由を 沛威亮は  
 相拘は次第に容易時長は山座の爲に年注古  
 より次第に拘別段の義は月如指の山評議を  
 以玩球圖より持渡の唐物不依何品以来胎子  
 交易は免は作付は下座を預め右通注古より  
 胎子に交易は右利潤は右糊口は中古より  
 り長海山高法は相答の額は右通注古停止  
 作酒其上高法は右茶書は振合は相成の故

國用は四民は是是非非のハ中葉は相敬強  
 在は右長終横漢表外國人最淨邦内町人百姓  
 近胎子に諸品交易は作付の月圓洋より江戸  
 表は通注の者は見因は右座の爲に茶條相款  
 實は氣配は相拘の爲に心配は在格に心配遠  
 不仕は板中論の故に何分迄鄙生立の者は一  
 回には通注の爲に年拾別は山評議を以横  
 漢同板茶葉を預め通胎子交易は舊來の通注免  
 作付は下座を預め右代物の義は山法度之  
 品一切差酒は中心故は山座の依は彼是舊來

別招く沃柄山汲百普 市仁徳を市布延琉  
球國山救既至成下公板厚山評議奉願公世後  
中上公以上

松平修理右吏門

七月十二日

西 龍右由

松平修理右吏家来差上公

唐國貿易之義三月評議仕中書付

外國より

松平修理大吏より同家山琉球國不願に下

海舟書屋

並公次方茶薩摩國に往年支那高取渡来以多  
一公沃柄山徳に中立招別に山由依り有る公  
受其渡逐に山仕法相変り唐板も長治り外海  
来山片評議に琉球高法も十六種限り賣捌山  
免相成山治に近年援渡表山板板に援板江戸  
表に通河に國人を見同仕往年に振合も有る  
國柄三月一同波是中唱人氣日差答に持協合  
も山度公昌胎子交易旧来に通山免山成下公  
板願公額に書面山市山成一覽部毎仕公受書  
中に大意琉球國山板板部を主張いふに

二此法在旧来と通稱し交易の度洋相預めと  
 の多中主として薩列表にも唐高祖の考へ心  
 以て相向へたものと不容易の沿革節二と自  
 然國二と見答二も相成且往年より由法二智  
 るに達達と改正を伴ふ上と進軍の沙汰  
 二相成の處を踏へ法事心得不中ふとと強相  
 成節二有る様二諸侯領國は外國高祖の考へ  
 ても同法二と強相成式二月詔り可否より沙  
 汰難及及と考へた琉球國高祖十六種二  
 限りふたハ先年長崎會所おため唐方より買

更ふ品々々外琉球國よりさし酒の唐物数多  
 相成同品相寄ふ故相場下落しめ一益損相成  
 二二其額預主の上長崎表に持酒りふ品数  
 少く分を琉球國よりさし酒の若くは酒定相成  
 二此の額二兼及ふる進軍進三港の開相成者  
 國より法貨物預け二持酒りの上と琉球より  
 さし酒の分而已有捨為酒のと不都合二も相  
 同で中二二月右と一應長崎表に持酒り  
 上先表と通何品二不限長崎表に相成二同所  
 終り賣捌り度山見洋相成で酒二二此の其

他々康王親王及内沙治吉野作治等御存御心  
内下々々書内内目付に相込し親王評議仕止  
候中上々以上

戊八月

村垣漢治

津田近江

一色山城

田沢對馬

菊池伊豫

井上信濃

海舟書屋

按じ此來表面ハ琉球の技師を名とし國  
計の一助とあるはありといへとも其更々  
源き算多の御事を奉じして元來薩の先産  
裔彬々英明の孫世の知る事あり當時外交  
の論起るは會し天下の物議墨化として京  
師に於ても殊々

敵意を勞させ給ひ諸藩遊説の士々東西に  
奔走し遂にハ公武の同柄柄となく由  
縁隔し厥人形勢を深く憂念し其次第に  
同亮正保と密に議せられし事ありて年

九  
竟邦人の外交を爲はる幕府ひとり其利を  
壟断するの嫌なき能はざるより同て諸  
大藩にもかく其利を均霑せしむる其國  
人不平の氣を懷し且其藩士等親しく外  
人にも接し自他双方猜疑の念をも永拭す  
るにむらん幸ひ薩列々注古の由緒もあれ  
ハ先づ琉球の貿易より始るんハ事順じ  
して彼我の利便あるへとの事して其他  
種々國家の大計は心魂を碎りし不幸  
よして半途而廢をありて其志を果さず今以

後顧を全く先達の遺志よりあるん此時  
阿波國亮々已に世を去り時の有司其遠圖  
を密せし特は一藩の私計は如くとあり膠  
柱の小見を以て時勢を辨せし以て漸く諸  
藩の惟心を失ふ俗吏の誤國豈唯是のにか  
らんか

海舟書屋

九八七

